



写真：電気情報工学科2年 田中秀典「瀬戸のだるま夕日」



1. 読書と私
2. 読書感想文等入賞結果発表
3. 講評（高松・詫間）
4. 入賞作品紹介

学校長 安蘇 芳雄

《高松》読書感想文	【優 秀 賞】	電気情報工学科2年 浅川 万知
	【佳 作】	建設環境工学科4年 木村 真人
千頁読破記	【優 秀 賞】	建設環境工学科4年 山地 夢十
夏休み体験文	【優 秀 賞】	建設環境工学科4年 三苫 憲伸
《詫間》読書感想文	【最 優 秀】	1年1組 (CN) 音島 立哉
エッセイ	【最 優 秀】	通信ネットワーク工学科3年 前山 胡桃
小説	【優 秀】	情報工学科3年 平岡 将他
短歌	【優 秀】	電子システム工学科4年 間部帆乃夏他
俳句	【グランプリ】	電子システム工学科3年 大西 美帆他
写真	【最 優 秀】	電子システム工学科2年 尾崎 玲音

5. 教員・学生による推薦図書 全20篇（教員10篇、学生10篇）

6. 教員によるエッセイ

情報工学科 谷口 億宇

7. 図書委員長より

8. 専攻科生より

9. ブックハンティング紹介

10. 編集後記

# 読書と私

学校長

安蘇 芳雄



校長として図書館だよりの巻頭言を書くように依頼されて、何を書くべきかに悩みました。校長としても教育者としても誠に不謹慎なことではありますが、私に読書や図書館について語る資格はありません。なぜなら、必要に迫られて専門書や実用書を読むこと以外に、いわゆる読書が趣味でも好きなほうでもありませんし、文芸書を読むために図書館を積極的に利用することもほとんどありませんでした。

私は高校時代をバンカラ（蛮殻）気質の伝統を受け継ぐ東北地方の学校で過ごしました。バンカラとは、明治期に急速に広まった西洋風の身なりや生活様式（ハイカラ）に反骨するアンチテーゼとして生まれたもので、旧制高等学校での流行が発端とされています。外見は弊衣破帽（着古して擦り切れた学生服や学生帽）を、内面は質実剛健（充実して誠実を重んじ、心も体もタフなこと）を旨とするものです。そこで学生歌としてもよく歌われていた中に「デカンショ節」があります。ご存知でしょうか。兵庫県篠山地方に伝わる民謡・盆踊り歌のようですが、多くの替え歌があります。最も有名でよく歌われる歌詞が「♪デカンショデカンショで半年暮らす アヨイヨイ あとの半年しゃあねて暮らす ヨーオイ ヨーオイ デカンショ」というものです。学生たちにとってこのデカンショとは、デカルト、カント、ショーペンハウエルの三哲学者のことでした。そこで、これらの古い訳本を手にして読んでみることを試みました。しかし、言葉自体が難しく、そこで語られている内容はチンプンカンプンですぐにやめてしまい、理解できない悔しさだけが残りました。ただ、精読の姿勢はこの時期に身についた気がします。以来、読みたい本は手元に置いて、内容が理解できるまで時間をかけてじっくり読むようになり、期限までに返却しなければならぬ図書館の本を利用することはほとんど無くなりました。しかし、タイトルや書評に釣られて買っては見たものの、しっかり読んでも興味がわからない本や展開が遅くて付いていけない小説などは途中で読むのをやめて、そのまま本箱で眠っている

ものがたくさんあります。一方で、専門書や実用書は、既知っている内容やわかっている部分は読み飛ばして必要な部分だけを拾い読みし、しかも完全に理解できるまでは手放せないで、こちらと同じようなタイトルで完読していない本がたくさん並んでいます。しかし、そうした数少ない読書の中からも、学んだこと、人生の糧となったことはたくさんあると感じています。

さて、2001年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されています。ここでの「子ども」とは、おおむね18歳以下の者をいうと定義されています。この法律では読書活動の意義を「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである」（第2条）と述べられています。よく言われることですが、読書活動は読者の疑似体験です。一生の中で実体験できる事柄・事象は限られています。その反面、読書活動の中では、本の中に仮想的に身を置いて感じ、考えることで、実体験できない様々な多くの状況を体験することができます。これらは実際にそのような状況に遭遇した時の予備体験として捉えることもでき、対人関係や人生に対する自分の考え方、対処法、方向性など多くのことを学び、会得することができます。これらは、技術的にはバーチャル・リアリティ（VR）の世界と見ることができます。現代の技術は、VRゴーグルを付けて、限りなく現実と本質的に同じであるような環境を作り出す方向に向かっています。一方で、読書活動から描かれる情景・環境や状況は、読み取り方、感じ方、想像性によって千差万別で、人によって異なり、したがって異なる解釈も出てきます。こうした複雑な精神活動から、先の法律で謳われている「読書活動の意義」が生まれてくると考えられます。それは多感な「子ども」の時期だからこそ体験しておくことが重要です。そして、個人の基盤としての教養、価値観、感性などを生涯を通じて身につけていくことにつながります。本に限らず、仮想現実の程度に差こそあれ、映画、テレビドラマ、絵画、写真、音楽なども、同じような精神活動を伴わせることで「人生をより深く生きる力」につながるもの、と私は考えています。

高専生の皆さんは、大学入試対策としてこのような文芸・芸術に接したり、解釈したりする必要はありません。今の年代だからこそ、実質的な関わりを体験してもらいたいと思います。そうしたものに会うきっかけとして、図書館を大いに活用してください。



## 夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文等 入賞結果発表

今年度の夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文・図書館文芸コンクールの入賞者の表彰式を、高松キャンパスでは11月13日(火)に、詫間キャンパスでは11月6日(火)に実施しました。入賞者は以下のとおりです。



高松キャンパス表彰式



詫間キャンパス表彰式

### 【高松キャンパス】

<b>読書感想文</b>			
優秀賞	電気情報工学科2年	浅川	万知
佳作	1年1組(EC)	吉田	健人
佳作	建設環境工学科4年	木村	真人
<b>千頁読破記</b>			
優秀賞	建設環境工学科4年	山地	夢十
佳作	1年2組(MS)	高嶋	柁伍
佳作	1年3組(EC)	藤居	虹帆
佳作	建設環境工学科2年	松岡	佑樹
<b>夏休み体験文</b>			
優秀賞	建設環境工学科4年	三笥	憲伸
佳作	1年1組(CV)	河野	花香
佳作	建設環境工学科2年	合田	満奈美
佳作	機械工学科3年	石坂	基樹

### 【詫間キャンパス】

<b>読書感想文</b>			
最優秀賞	1年1組(CN)	音島	立哉
優秀賞	情報工学科3年	田貝	奈央
優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	三好	虎次郎
<b>エッセイ</b>			
最優秀賞	通信ネットワーク工学科3年	前山	胡桃

優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	小藪	祭詩
優秀賞	情報工学科2年	河内	陸
優秀賞	1年2組(IT)	山口	凜人
<b>小説</b>			
最優秀賞	該当なし		
優秀賞	情報工学科3年	平岡	将
優秀賞	1年1組(IT)	宮本	匠
優秀賞	1年3組(IT)	玉川	小太郎
<b>短歌</b>			
最優秀賞	該当なし		
優秀賞	電子システム工学科4年	間部	帆乃夏
優秀賞	通信ネットワーク工学科3年	佐竹	櫻
優秀賞	1年2組(IT)	井澤	早紀
優秀賞	1年2組(IT)	真鍋	光
<b>俳句</b>			
グランプリ	電子システム工学科3年	大西	美帆
優秀賞	情報工学科3年	大野	友暉
優秀賞	情報工学科2年	佐々木	龍聖
佳作	1年3組(ES)	陶國	多聞
<b>写真</b>			
最優秀賞	電子システム工学科2年	尾崎	玲音
優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	大西	陽向
優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	小藪	祭詩

## 講評

### 高松キャンパス 一般教育科 国語科

今年の応募総数は、読書感想文が110篇、千頁読破記が136篇、夏休み体験文が242篇の合計488篇でした。読書感想文と千頁読破記には今年も様々な本が並びました。日頃は本を手にする機会の少ない人が夏休みという時間を使って1冊の本に出会ったり、好きな作家の本をまとめて読むなど目的意識を持って読書に取り組んだり多くの人が本と触れ合う時間を持ってくれたようです。また、夏休みの思い出を体験記としてまとめた人の文章からは学校生活を離れた時間の中でそれぞれに貴重な体験をしたことが伝わってきます。その多くの作品の中から今年度は読書感想文優秀賞に2EC浅川万知さんの「『知る』ことから『学ぶ』」、千頁読破記優秀賞に4CV山地夢十君、

そして、夏休み体験文優秀賞には4CV三笥憲伸君の「霧箱と放射線をめぐって」が選ばれました。

読書感想文で優秀賞を受賞した浅川さんの作品は、今日世界中で2億1800万人もの児童労働者の現状を紹介している『私は8歳、カカオ畑で働きつづけて。』を読んだ感想です。世界に広がりつつある格差社会の中で、勉強したくても学校にも行けず、家族のために必死に働く貧困家庭の子どもたち。そうした子どもたちが作ったカカオやバナナ、スポーツシューズなどの商品を、何も知らずにのんきに買い物をする自分がいることに気づいた浅川さんは、自身が裕福であることの無自覚さと無知の怖さを感じつつ、今の自分に何ができるかを、本の内容紹介とともに、自分自身の意見も交えながら分かりやすく述べています。確かに、児童労働の過酷な現実を私たちは普段まったく気にすることなく、今の自分の生活においてより便利で快適なもの求めて過ごしているように思います。この作品からは、自身の無知を反省しつつ、今できることに積極的に取り組みたいという浅川さんの強い思いが伝わり、私たちの生き方を改めて考える契機を与えてくれるものとなっています。

読書感想文で佳作を受賞した木村真人君の作品「多動力」は、全体的な文章構成もよく考えられており、本屋での堀江貴文氏の『多動力』との出会いから始まり、自身の物事の捉え方や社会の見方が大きく変わっていく様子が丁寧に描かれています。特に、自分にしかできないこと・自分の好きなこと・得意なことは全力で行い、それ以外のことは手抜きをしたり、他人に任せたりする生き方に感銘を受けた木村君は、固定観念に囚われがちな大人にこそ、子どもの心を失わずに興味あることに突き進む行動力と勇気が大切であると述べています。この作品は、変化のスピードが速い現代において、保守的で非効率的な生き方に満足している生き方を反省するとともに、無駄を省き効率の良さを考えながら自分らしくチャレンジし続ける「多動力」の大切さを実感させてくれます。

千頁読破記で優秀賞を受賞した山地君の作品には、「ミニマリズム」に関する5冊、合計1365頁を読破する中で掴んだ新たな生き方・価値観が綴られています。片付けができないことを出発点にこの一連の読書を始めた山地君は、「ミニマリズム」の持つ新たな概念に出会い、過去への執着と未来への不安に囚われず、今を大事に生きることの大切さを述べています。私たちは「ミニマリズム」と聞けば、単に片付け上手で物を減らすことに喜びや生き甲斐を見出すことが目的であると思いがちです。しかし本来の「ミニマリズム」とは、物を減らすことは目的ではなく手段であり、本来の目的は、今の自分がしたいことに集中することであると述べています。この作品は、「ミニマリスト」として身の回りの物を最小限に留めながら、今の自分の活動に集中する生き方に気づいた山地君の感動が伝わってくるとともに、物に溢れた生活の中に生きる私たちに、新たな生き方を教えてくれています。

三笠君の夏休み体験文「霧箱と放射線をめぐって」は香川高専高松キャンパスの玄関ホールに設置された「世界一」と銘打った霧箱に対する思いで溢れています。インターシップを利用して訪れた茨城県と福島県の2つの科学館で霧箱を見学する体験記の箇所は、高松キャンパスの霧箱より大きめの迫力ある霧箱の姿と、高松キャンパスよりも薄暗い空間の中に静かに存在感を主張する霧箱の様子が臨場感を持って描かれています。どちらの霧箱も三笠君にとって霧箱の素晴らしさを再認識する大切な切っ掛けになったことが伝わります。夏休みを終え、玄関ホールの霧箱と再会する三笠君は改めて学校の霧箱に対して熱い思いを新たにします。私達の見ているものの中には常に目の前にあるからこそそれが当たり前で何も感じなくなるものがあります。でも本当は目の前にあるそれは大事な貴重なものかもしれません。それに気づかず日常を過ごすことが如何にもったいないことなのか、三笠君の体験から学びました。体験と思いの両方が上手にまとめられた優秀賞に相応しい体験文となっています。

## 詫間キャンパス

### 一般教育科 国語科

図書館文芸コンクールも第3回を迎え、多数の応募作品が集まった。以下、受賞者を中心として、部門ごとにコメントを付していく。

#### ・読書感想部門

全体的に、読書感想文の型に無理やりはめ込んだような

作品が多かった。本を読んで自分がどのように考え方が変わったか、その本でなければならなかった必然性が伝わってこない点は残念に感じられた。その中で音鳥立哉君の作品は、本のテーマ性を読み取り、自分自身とひきつけ、考えの変化を具体的に説明することができていた。物語の内容と経験の丁寧な結び付けが、評価のポイントとなった。このテーマ性の引き付けという観点が、田貝奈央さん、三好虎次朗君の作品の評価にもつながっている。それぞれ実りのある読書体験をおもわせる作品だったが、全体の構成や文のつながり、主張の詰め込み方など、読み手に対する「伝える文章技術」を今後の課題とされたい。

#### ・エッセイ部門

形式にとられないエッセイの特質に注目し、若者の主張における力強さが伝わる作品が多く、非常に印象的な部分だった。前山胡桃さんの作品は、自身の夢に対する思いが具体的なエピソードとともに力強く語られている。不安、感動、期待など複雑な心情の告白は、高校生の今だから書くことが出来るエッセイであると評価した。小藪祭詩君、河内陸君の作品も、自身の好きなものに対する熱い思いを独自の観点から語っている。山口凜人君の作品は、身近なものから次第に話題が広がっていく仕掛けに面白みがある。次のステップアップとして、一番伝えたい主張へ至るための説明の順番や、文の繋がりを意識してほしい。

#### ・小説部門

応募作品のほとんどが短編の小説であった。短編の場合、世界観や登場人物の矛盾が少なくなり、全体の調和を図りやすく、起きた出来事を語ることに適している。しかし、短い分、登場人物のインパクトや、先行する作品との差異化に技術が必要である。平岡翔君の作品は主人公の独白から始まり、正体、置かれている状況が徐々に明かされていく展開が興味深い。宮本匠君の作品は、季節の移り変わりが、自然描写と人間の関係とともに繊細に書き出されている。玉川小太郎君の作品は、何気ない日常の風景に隠された真実が最後に明かされるという構造である。三者ともに工夫を凝らし、読者を楽しませる作りとなっている点が評価された。しかし、短編故の説明の物足りなさが目立つ。更なる描写が期待される点で無理にまとめた印象が否めない。これにより、最優秀は見送りとなった。

#### ・短歌部門

「色」をテーマとして設定した今回の作品は、自由な発想で日常の季節を切り取る、自然詠の作品が多く見られた。間部帆乃夏さんの作品は、花火の風景を色彩豊かに表現した一首である。歌の中で時間の経過も盛り込まれ、情景が頭に浮かんでくる作りとなっている。佐竹櫻さん、井澤早紀さんの作品は、一つの風景から発想を膨らませ、ストーリー性をもたせた歌である。真鍋光君の作品は歌言葉ではない語句を組み込み勢いとリズムを作り、読み手の興味をひくことに成功している。作品は自由に柔軟な発想で詠まれてるものが多かったが、口に出した時のリズムや言葉の並びが引っかかりを感じるものが目立った。三十一文字という、音の並び、リズムは短歌では重要なものであり、意識的な作品づくりをしてほしいという思いから、今回の最優秀の選出はされなかった。

#### ・俳句部門

大西美帆さんの作品はオーソドックスな読みぶりであるが、表現の基本を押さえて、読み手の想像を膨らませる工